



## 第6回 静岡文化芸術大学

高校の先生方へのアンケートで評価の高い大学を紹介するシリーズ。今回は、「どのような学生を育てたいか教育理念がはっきりしている」「ユニークな教育内容、就職実績に注目している」と評価されている静岡文化芸術大学を訪問した。

### 「出会う、感じる、創造する」という言葉を大切に 文化・芸術とマネジメントの橋渡しができる 人材の育成を目指す

静岡文化芸術大学は、2000年、静岡県浜松市に公設民営方式の私立大学として設立され、文化政策学部、デザイン学部の2学部6学科で構成されている。全国で初めて文化政策学部を設置、またデザイン学部では「ユニバーサルデザイン」を基本理念にしている。キャンパスはJR浜松駅から徒歩15分の中心市街地にあり、通学に便利なおともあり、在学学生は女子学生が約75%を占めている。開学10周年にあたる今年、公立大学法人に移行し、今後の大学志願者の動向も注目されている。

今回は、大学の理念と育成する人材像、それを実現するためのカリキュラムについて話を伺った。

文化政策学部教授で教務部長の根本敏行教授は、次のように説明する。「初代学長がよく言っていたのは、花も実もある人材の育成です。花があるというのは文



根本敏行教授

黒田宏治教授

化的素養がある人材、実があるというのは、文化を文化政策・文化事業として発展させることができる人材です。芸術家を育てるのが目的ではなく、文化・芸術とマネジメントの両方に目配りができる人材の育成を目指しています。また、文化や芸術への目配りといっても、芸術作品として作られた美術、絵画、彫刻などの『ファインアート』だけではなく、生活や社会を含めた広義の文化・芸術への関心です。こうした考えのもと、マネジメントに比重を置くのが文化政策学部であり、芸術・デザインに比重を置くのがデザイン学部なのです」

また、開学当初より教鞭を執っているデザイン学部生産造形学科長の黒田宏治教授も「大都市圏であれば、専門分野に特化した人材も大いに活躍できますが、地方では幅広い知見を持つ総合的な力を持った人材が必要との考えもありました」と続ける。

加えて、知性と感性を育む教育のキーワードを「出会う」「感じる」「創造する」とし、これからの時代に取り組むべき課題のキーワードの例として「ユニバーサルデザイン」「アートマネジメント」「多文化共生」を掲げている。

### 文化的素養とマネジメント力を兼ね備えた 「花も実もある」人材を養成

静岡文化芸術大学は、浜松市や地元産業界からの人文社会科学系の大学設置の要望を受けて静岡県立大学短期大学部浜松校を改組し、その人材育成を目的に設立された。そのため大学の理念には「実務型の人材を育てる大学」「社会に貢献する大学」を掲げ、さらに新しい大学を創るにあたっては、これからの時代の要請に応える教育を提供すべきとの考えから、伝統的な学問の枠組みにとらわれずに学部・学科を設置することにした。

では、新しい時代の要請に応える学部・学科とは何か。

<図表1> 2010年度 文化芸術総合演習の概要

方法	2010年度予定	教育内容等
<b>【特別講義方式】</b> (計15コマ) 静岡文化芸術大学の理念・目的、教育方針の理解および人間が持つ感性、美意識の練磨、想像力の呼び起こし	● 講話(4コマ) ・熊倉功夫学長 ・有馬朗人理事長 ・三枝成彰センター長 ・濱本英輔氏	・大学で学ぶことの意味を静岡文化芸術大学の理念、目的等を通じて学ぶ。 ・静岡文化芸術大学の学生に寄せる期待等について学ぶ。 ・大学で何を学ぶかを考える。 ・各自のキャリアについて考えるきっかけを与える。
	● 狂言体験 (2コマ)	・日本の伝統芸能の所作、舞い、発声といった身体表現の鑑賞・実技講習を通じて、自分の身体を使って表現することの魅力と、表現の前提として感じること・感性の重要性を体感する。
	● 茶道体験 (茶講話・茶点前) (2コマ)	・日本文化を代表する茶道の持つ総合性 (哲学、芸術、社交等) を理解させるとともに、お点前体験を通して、人間の持つ特性、美意識の魅力を体感する。
	● デッサン体験 (2コマ)	・素描を通じて自らを見つめ直し、表現したいものと表現したこととのギャップから、自己表現の難しさの魅力に触れる。
	● 資料探索法 (2コマ) 図書館・情報センター	・図書館ホームページ上にあるオンラインデータベースの使用法等、資料探索法について学ぶ。
	● 実習 (3コマ)	・担当教員が工夫して行う。
<b>【教育分担方式】</b> (計15コマ) 大学生として必要とされる基礎的能力・コミュニケーションを高める自己表現力の養成	○ 演習 (15コマ) 18クラスを専任教員18名が分担担当。 ・資料の読み方、資料検索の方法、文書作成の基礎知識、口語表現の手法・討論方法などについて指導	・課題とする図書、資料等の文献の要点を整理し、内容を口頭発表する。 ・与えられたテーマに関する資料を収集してレポートを作成し、口述報告の後、集団討論を行う。

## 「静岡文化芸術大学での学び」の導入としての「文化芸術総合演習」

文化的素養とマネジメント力を兼ね備えた人材を育成するための教育の柱となっているのが、全学生の必修科目である1年次前期の「文化芸術総合演習」と、3年次前期の「企画立案総合演習」である。

文化芸術総合演習は、開学当初は、『芸術に触れる』『大学生としてのスキルを身につける』ことを目的にスタートしたが、現在は、『同大で学ぶ意義を理解しキャリアを考えるきっかけとすること』を含めた演習として実施されている。

具体的には、演習は6学科混成の約20名の少人数クラスで行い、<図表1>のように、『芸術に触れること』については「体験」を重視しており、狂言体験や茶道体験、デッサン体験を通して日本の伝統芸能や美意識に触れたり、表現したりすることの難しさや魅力を体感する。

『キャリアを考えること』については、毎年大学関係者、芸術界、スポーツ界、ビジネス界等の最先端で活躍する講師を迎えた講話を行っている。今年度は、茶道史や文化史などの歴史学者である熊倉功夫学長、物理学者で元文部大臣の有馬朗人理事長、作曲家で文化・芸術研究センター長の三枝成彰氏、(株)ロッテ顧問の濱本英輔氏が講話を行った。

『大学生としてのスキル』については、クラス担当教員による資料の読み方、文書作成の基礎知識、口語表現の手

法等の授業のほか、図書館・情報センターで資料探索法の授業を行っている。

『「芸術に触れること』『キャリアを考えること』『大学生としてのスキル』という3つの狙いは、基本的には別々に行っていますが、教員によっては体験や講話のあとにディベートをさせたり感想文を書かせて添削したりと、関連づけて行っています。共通テキストは作っていますが、活用は教員に一任しており、教員の特性を生かした指導をしています。また、担当者は定期的に会合を持つなどのFD (ファカルティ・デベロップメント) 活動も行っています」(根本教授)

また、6学科混成クラスの原因について根本教授は「例えば、文化政策学部の学生は、高校で美術はあまり熱心ではないけれども、地理や歴史などの勉強は一生懸命やってきた。一方、デザイン学部には、美術など芸術は熱心に学んだけど、地理や歴史などの勉強はあまり熱心ではなかった、という学生がいます。そこで学部を横断したクラスを編成することで、社会にはいろいろな人がいて、例えば同じ大学1年生でも高校で学んだことや、履修してきた科目が異なるなど、いろいろな興味・関心や、考え方を持っていることに気づいてもらおうというのが狙いです」と言う。

## 社会で活躍するための導入としての「企画立案総合演習」

文化芸術総合演習が大学への導入教育としての位置づけ

<図表2> 3年次企画立案総合演習のテーマ（抜粋）

- |   |   |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>● アクトシティをよく知ってもらおう</li> <li>● やっぱ「だら」だらあ!?(若者の方言離れ)</li> <li>● はままつ名産・特産品通り（常設）をつくる</li> <li>● 静岡文化芸術大学のサテライトキャンパスを作ろう</li> <li>● 実録!! 廃れゆく七間町!! 一映画館街を救っちゃえ!!</li> <li>● 静岡空港を利用した観光の活性化</li> <li>● 静岡の和菓子</li> <li>● 残飯の無駄をなくそう</li> <li>● 食糧自給率向上!</li> <li>● 浜松音楽祭りをつくろう</li> <li>● 熱海の若者観光客の増加</li> <li>● 地下道を利用した楽しい街づくり</li> <li>● 視覚障害者が暮らしやすい街づくり</li> <li>● 浜松のファッション</li> <li>● 浜松の地酒のPR</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>● はままつヤママップ</li> <li>● 遠州鉄道のユニバーサルデザイン化</li> <li>● 駐輪場改善計画</li> <li>● 浜松活性化 一生まれ変わる松菱一</li> <li>● ゆかたが世界と静岡をつなぐ</li> <li>● お墓未来予想図II 一浜松に Kyodobochi を一</li> <li>● 動物の命を守る 一殺処分について一</li> <li>● MOTTAINAIレシビ!! ~家庭の残飯を減らそう~</li> <li>● 落書きの抑止による住環境の改善</li> <li>● 万引き対策</li> <li>● 地震が起きたときのためのハンドブック作り</li> <li>● ブラジル村をつくる</li> <li>● 燃えあがれ! 静岡空港</li> <li>● 浜松市地域活性化 一繊維産業の復活へ一</li> <li>● 浜名湖うなぎピンチ!?</li> </ul> |
|---|---|

で、文化的素養の育成に重点を置いているのに対し、3年次の企画立案総合演習は、社会人への導入科目として実務型人材の育成に重点を置いている。

企画立案総合演習では文化芸術総合演習のクラスが再結集され、1クラスが5～6名ずつのグループに分かれて地域社会の課題を発見し、調査し、解決のための企画を立案し、提案を行うことにより、事業の構想を体験的に学習するものである。取り組むテーマは、社会性があることを条件とし、社会に対して自分たちの提案がどのような役割を果たせるかという視点で選んでいる。これまでのテーマには「駐輪場改善計画」「静岡空港を利用した観光の活性化」「遠州鉄道のユニバーサルデザイン化」などがある<図表2>。

「行政機関であれ企業であれ、社会人になったら、自分でアイデアを出したりプレゼンテーションをしたりする場面や、チームの取りまとめ役としてプロジェクトを推進するという場面があります。企画立案総合演習は、そういうことに対する準備であり、本学では社会人となるための導入教育として位置づけています」（根本教授）

また根本教授は、「1年次の文化芸術総合演習のクラスの再結集」も、重要な意味を持つと言う。

「それぞれの学部・学科で2年間過ごすうちに、それぞれの学部・学科の教育内容を反映して、例えば、文化政策学部の学生は文献を調べるのが得意、デザイン学部の学生は絵を描くのが得意といった専攻に応じた知識やスキルを身につけます。わずか2年の間に身につけた力には、お互いに目を見張るものがあり、刺激を受けます。そして、お互いにグループで個性を発揮し、それらをまとめて1つの

目標に向かっていく。それが、3年次、4年次の勉学の刺激になっていると思います」

なお、企画立案総合演習の成果は、数クラス合同で発表会を開くほか、行政機関等に対してプレゼンテーションをすることもするという。

また、「社会を構成する人間の一人として、豊かな人間性を身につけるための基礎」として、『人間の魅力』『総合的判断能力』『感性』『地球的・国際的視野』『時代認識』

『表現力』の6つの基礎を設定している。文化芸術総合演習と企画立案総合演習でこれらを育成しているのはもちろんだが、1・2年次を中心に履修する全学共通科目において、6つの基礎を「導入教育」「情報処理」「言語コミュニケーション」「身体科学」「人間観の形成」「芸術文化の理解」「現代社会の認識」に分けて、それぞれ授業科目を配置している。その中の「芸術文化の理解」では、「静岡学」という地元に関する科目や、「空間とデザイン」「道具とデザイン」「映像エンタテインメント論」など文化・芸術を意識した科目も設置されているのが特色だ。

**教育と時代を考えるキーワード  
実践のための多様な取組み**

知性と感性を育てる教育のキーワードである「出会う」「感じる」「創造する」については、学生が大学生活を送りながら、自然に経験できる仕掛けが施されている。例えば、学内にいくつかギャラリースペースがあり、学生の作品はもちろん、海外作品の企画展もよく開催している。また、オペレッタを上演可能なホールもあり、同大の学生は鑑賞することができる。

主にデザイン学部で使用する施設・設備についても、さまざまな工房・特殊機器を備えている。例えば、ユニバーサルデザインを考える上で必要な、人間の動作や姿勢、筋肉の負担などを測定する機器などを揃えた人体機能実験室、乗用車などの実物大モデルをクレイ（粘土）で制作することができるクレイモデル室をはじめ、恵まれた環境が整っている。クレイモデル室については、「企業にはもち

ろんありますが、大学で持っているところはあまりないと思います。大きなものとしては、1人乗り小型自動車の実寸大モデルや二階建て路面電車の6分の1サイズのモデルを作りました」(黒田教授)

そして黒田教授が「創造性」を大切にするための施設として挙げるのが総合組立アトリエである。「ここは特に何か設備や機器があるというわけではなく、天井が高くて広い部屋ですが、セсна機くらい作れる空間を確保しようという意気込みで作りました。広いスペースで学生はいろいろなことに取り組んでおり、非常に大きなキャンパスに絵を描いたり、浜松まつりの凧揚げで使う凧を作ったりしていた学生がいました。ちなみに、凧の大きさは2帖から、大きいものは10帖(約4m×4m)あり、学生が作っていたのはかなり大きな凧でした」

一方、これからの時代に取り組むべき課題のキーワードとした「ユニバーサルデザイン」「アートマネジメント」「多文化共生」についても、いくつもの取り組みが並行して実施されている。

例えば、「ユニバーサルデザイン」に関するものには、デザイン学部の教員の呼びかけにより課外活動として行っている「自助具デザインプロジェクト」がある。自助具とは、身体の不自由な人の日常生活を支援するための道具のことで、使い手の依頼を受け、一人ひとりにあった道具をボランティアで制作している。

「アートマネジメント」に関するものとしては、特別公開講座として毎年行っている「<sup>たきぎのう</sup>新能プロジェクト」がある。これは、学生によって新能の企画、広報、舞台設営、会場運営等を行うものである。

また、浜松市は自動車メーカーや楽器メーカーが立地することから、外国人登録者、とりわけブラジル国籍の住民の多い都市である。そこで「多文化共生」に関することとして、教職課程を履修する学生が主なメンバーとなり、教員のサポートを受けながら、外国籍児童の多い小学校で学習の補助に取り組む「学習支援ボランティア」を行っている。さらに今年からは、国際文化学科に全学に開かれた「日本語教員養成課程」を創設した。

## 小規模大学のよさを活かした きめ細かな就職支援を実施

最後に、同大のキャリア形成支援、就職支援、就職状況について概観しよう。



△写真▽クレイモデル室の様子  
学生が自動車のクレイモデルを作成している

まず、単位が認定されるインターンシップがある。インターンシップは、3年次夏期休業中の2週間を利用して行われ、毎年約3分の1の学生が履修している。学生は、インターンシップの計画を届け出て、認められた後、4回の事前学習を経て実習を行う。インターンシップ終了後は報告書を提出した上で、単位が認定される。履修希望者数以上の受け入れ先を大学が確保しており、実習先として、国際文化学科であれば旅行代理店や金融機関、文化政策学科であれば行政機関、芸術文化学科であれば美術館をはじめとする展示施設、生産造形学科はプロダクト系の企業、メディア造形学科は映像制作系の企業、空間造形学科は建築系の企業と、それぞれ卒業後に就職を希望する職種に関連する企業の協力が得られているという。

就職支援については、1学年の定員が両学部合わせて約300名という小規模大学であることを活かし、3年次後期に、就職室の職員が全学生に対して個別面談を行っている。その後も希望者には随時面談をしたり、求人があれば、その業界や職種を希望する学生に紹介するといったきめ細かな対応を行っている。

こうした教育や支援の結果、2010年3月卒業者については、就職を希望する学生の91.9%の就職率を達成。文化政策学科の就職先は、製造業、旅行代理店やホテルなどのサービス業、地元の銀行、信用金庫など金融・保険業、小売業への就職が多い。デザイン学部は、製造業や設計、広告、デザイン事務所などへの就職が多く、県内のほか首都圏に就職する学生が多いという。

「設立して10年を迎え、1～3期生がリクルーターとして本学を訪れるようになりました。また、デザイン学部の卒業生が手がけた作品を、街中やメディアで見かけることもあります。社会からの卒業生への高い評価こそが何よりのPR。よいスパイラルを作っていきたいと思います」(根本教授)